

ラサールの労働者アジテーション 挑戦と挫折 (5)

——モラル・パニック論による分析と叙述——

篠原敏昭

キーワード：フェルディナント・ラサール，労働者アジテーション，
労働者 kongress 運動，全ドイツ労働者協会，プロイセン憲法紛争，
ドイツ国民協会，ドイツ進歩党，シュルツェ＝デーリチ，
『フォルクス・ツァイトウング』，ビスマルク，モラル・パニック

[本誌第 27 巻より続く]

第 4 節 ラサールの挑戦とラサール・バッシングの展開

(ii) ラサール・バッシングの発生と展開

『公開返書』は 1863 年 3 月半ばにスイスの出版社から刊行された。自由主義派系諸新聞がラサール非難を展開するのは 4 月初め以降なのだが、このモラル・パニック現象を考察するに先立ってしておくべきことがある。『公開返書』の内容がいかに挑戦的で挑発的だったにせよ、それが刊行されただけで、あるいは著者がラサールというだけで、バッシングが始まったわけではない、ということだ。進歩党陣営のなかにモラル・パニックが生じるには、ライプツィヒ中央委員会が『公開返書』を運動の新綱領に採択した 3 月 17 日の会合、そして委員会のこの新方針を承認し、「ドイツ労働者協会」設立委員会を新たに選出した 3 月 24 日のライプツィヒ労働者集会を経なければならなかった。

まずは 3 月 17 日の委員会会合、ついで 24 日の労働者集会を考察する。バッシング現象を扱うのはそのあとである。

a 3月17日のライブツィヒ委員会会合と『公開返書』の採択

ラサールは3月13日付のダマーあての手紙でこう指示している。『公開返書』は15日には刷りがあがっているはずだから、印刷所で受け取るように⁽³³⁸⁾、と。版元はチューリヒだったが、印刷はライブツィヒだったのである。ダマーは早速16日に小冊子を受け取り、委員会執行部は翌17日に会合を開いた。ダマーはその様子を3月26日付の手紙で、24日の労働者集会の様々とともにラサールに報告している。17日の委員会会合に關係する部分を引用しよう。

私はその会合で小冊子を読みあげました。シュトレックフースが出席していて、小冊子の無条件採択に反対を述べましたが、何も達成しませんでした。出席した10名の委員のうち6名が無条件の採択に賛成票を投じ、少数派は、条件付きで同意を与えるという2名と、小冊子をたんに紹介するだけという2名に分かれました。後者はのちに脱退しました。弁護士ヴィンター（ライブツィヒにおけるシュルツェの使い走り）とロースメスラーも同様に、顧問の職を辞任しました⁽³³⁹⁾。

ベルリンのシュトレックフースがなぜライブツィヒの会合に出席していたのかについては、あとでふれる。ダマーの報告を補足すると、脱退した2名の少数派委員のうち1人はドルゲで、翌18日に辞任を表明した⁽³⁴⁰⁾。もう1人はおそらくハルトヴィヒ。ちなみに顧問のロースメスラーの辞任表明は、5日後の22日だったようだ⁽³⁴¹⁾。いずれにしるこの報告からは、ライブツィヒ委員会が17日の会合で、『公開返書』を6対4の僅差で綱領文書として推奨する決定をしたこと、および、委員会が3月17日の会合のその場ではなく、そのあとに分裂したことがわかる。

だが、わからないこともいくつかある。ここでは2点あげておく。第1に、ラサールの見解表明は、2月10日の委員会で決定した要請文では、シュルツェの方策以外の労働者の状態改善手段として求めた参考意見ほどのものだったはずだが、委員会執行部はなぜそれを、新綱領文書として強引に採択したのか。

これは、そもそも2月10日の要請自体が、急進派執行部とラサールがしめし合わせたものだったと解するしか説明のしようがない。分裂を覚悟の上の強行だったのだろう。第2に、3月17日の会合はなぜ、小冊子を受け取った翌日にじっくり検討する暇もないほど急いで開かれたのか。おそらく、これには कांग्रेस運動協議のために予定されていた事前集會をめぐる事情が関係している。結局は開催されなかった事前集會は、従来の研究や歴史叙述ではあまり注意を払われていない。だがそれは、この時期の委員会の行動の理解にとっただけでなく、進歩党陣營の反応の理解にとっても不可欠なものである。事前集會をめぐる事情をふり返っておく。

1862年12月以降、ドイツ各地の労働者教育協會から、 कांग्रेसへの不参加や開催延期、開催反対の意見などが数多く寄せられ、ライプツィヒ委員會が孤立しかけていたことはすでに述べた。これに対して委員會は、同時に寄せられていた事前集會の開催要求に2月7日頃、同意する声明を作成し、『アルバイター・ツァイトゥング』に送付していた。じつは2月10日のラサールへの見解表明要請はこの事情と密接に関連していた形跡がある。要請は、委員會が事前集會に事態打開案を携えていくための準備だったようなのだ。執行部は、ラサール自身にライプツィヒ労働者の代表として事前集會に行ってもらおうとしていた。ラサールあての2月23日付の手紙のなかで、ダマーはこう書いている。

さて我々は失礼ながら、ライプツィヒの労働者があなたを自分たちの委任者として、しかも直接、集會への派遣のために選出した場合に、あなたが事前集會に行ってもらえるかどうか、伺いたいのです⁽³⁴²⁾。

委員會執行部がラサールに依頼したのは、事前集會にはシュルツェ＝デーリチもそこ来て、影響を及ぼすことが予想されたからだ⁽³⁴³⁾。シュルツェに対抗できるのはラサールしかいない。ダマーはこう記す。

シュルツェの権威は事前集会で労働者をみな黙らせてしまいます。それにきつと重大な論戦がおこるでしょうし、原理が争われることになるでしょうから、あなた自身が自説のために闘うことはおそらくきわめて重要な意義をもつこととなります⁽³⁴⁴⁾。

ダマーは、ラサールが承諾すれば、この件は3月3日に予定した委員会会合で「抵抗なく処理される⁽³⁴⁵⁾」という見通しを伝えている。つまり、執行部はその会合で、ラサールの見解を綱領として採択することと、ラサールを事前集会への代表に選出することを併せて、3月3日にも決定するつもりだったのである。執行部には決定を急ぐ理由があった。事前集会に関する中央委員会の声明が近いうちに『アルバイター・ツァイトウング』に発表される——じっさいには3月1日付の紙面に発表——予定だった。その声明のなかで委員会は、自分たちは事前集会の開催要求に「完全に同意しており、この事前集会についての我々の見解を近々説明する⁽³⁴⁶⁾」と公言していた。

しかし、ラサールが『公開返書』刊行の知らせとともに、返事を書いたのは3月13日付のダマーあての手紙においてだった。委員会執行部は16日に『公開返書』を受け取って翌17日にただちに会合を開いたのである。

ところが、3月17日の中央委員会会合で事前集会について何か決定された形跡はない。委員会は17日の決定にもとづいて20日にドイツ諸都市の約100の労働者教育協会に『公開返書』を送付したが⁽³⁴⁷⁾、そのさいダマーとファールタイヒ連名の3月18日付の「ドイツの労働者へ」と題する声明文を添付している。この声明文は、ラサールを「最も抑圧された人民諸階層の忠実かつ確かな友」と呼び、『公開返書』の見解を「我々は完全に分かちもっている」と述べて、各地の労働者教育協会に対して小冊子を「労働者の間に可能なかぎり広めるために全力を尽くしてくれるように」要請したものが⁽³⁴⁸⁾、この声明文でも事前集会は言及されていないのである。

小論の推論が間違っているのだろうか。そうではない。委員会にとって想定外のことが生じたのである。ラサールが3月13日付の手紙で、事前集会への

ライブツィヒ労働者代表に選出されるのを断わってきたのだ。彼はその理由をつぎのように述べている。

私は事前集会で個人的影響力を行使してはならないのだ。もし私が参加すれば、事前集会が作成する決議はすべて、たんなる私の個人的影響力と優越の結果だと、ブルジョアジーに誹謗され矮小化されてしまう⁽³⁴⁹⁾。

この一見消極的な態度は、これまで見てきたラサールの性格と矛盾するようだが、根底にあるのはやはり、『公開返書』の労働者獲得効果への強い自信だろう。彼は同じ手紙のなかで記している。自分が出席しなければ、事前集会は「シュルツェ＝デーリチの精神における集会」になるかもしれないが、「私はこれに対していまや武器にして絶対的手段としてマニフェストを提供したのだ。労働者たちが成熟していれば、シュルツェ＝デーリチを粉碎するにちがいない⁽³⁵⁰⁾。」

では、ライブツィヒ委員会執行部はいったいなぜ事前集会に言及しなかったのか。おそらく意図的なのであろう。それによって各地の労働者教育協会の幹部も含めて、進歩党陣営に事前集会開催への期待を抱かせ、『公開返書』の送付で生じる「敵意」の爆発を遅らせようとしたのだらう。執行部にとっては、24日の労働者集会で、普通選挙権樹立のための「ドイツ労働者協会」設立委員会を無事選出することが、当面の最優先事項だった。執行部は、3月13日付のラサールの不承諾の返事と『公開返書』を受け取った時点ですでに、事前集会への不参加を決断していたのではないか。シュルツェが出てくる事前集会で『公開返書』を擁護できるのは、ラサール以外には考えられなかったからだ。

ライブツィヒ委員会の事情はともかく、ドイツ各地の労働者教育協会の幹部たちは、以前から委員会に対して抱いていた「懸念」を、ラサールの小冊子によって「敵意」へと募らせていた。それを示す史料として。日付は不明だが、南ドイツのニュルンベルク労働者協会のライブツィヒ委員会への抗議文がある。この文書はまず、『公開返書』が雇用主と被用者の分離を呼びおこし、自助の原理を国家援助の原理へ転換させて、労働者運動を社会主義・共産主義的な、破滅

に通じる道に導いていると警告し、ラサールを「反動の雇われた手先のように見える⁽³⁵¹⁾」と強く非難する。そして委員会につぎの要求を突きつける。

必要な団結と全労働者階級の幸福のために、ライプツィヒ委員会はその活動を一時停止して、指導権を、より多くの信頼を得ていると同時に、ラサールのような者に目を晦まされたり騙されたりしていない、もっと有能で善良な人たちに引き渡すよう要求する⁽³⁵²⁾。

この文言からいって、抗議文が3月24日の決定が知れわたる以前に作成された文書であることは明らかである。ところが自由主義派系諸新聞がこの文書を掲載するのは、早いものでも4月9日。3月24日の決定に関する非難記事の発表よりも遅いのである。抗議文がすぐに公表されなかったのは、やはり委員会から事前集会の開催について何らかの態度表明があるのを、ニュルンベルク労働者協会か新聞編集部いずれかが待っていたためだろう。

シュルツェも「懸念」を「敵意」へと募らせながら、ライプツィヒ委員会の事前集会に関する態度表明を待っていた形跡がある。シュルツェは、シュトレックフースから3月17日のライプツィヒ委員会会合について18日にベルリンで報告を受けている。シュトレックフースはダマーの誘いで17日の会合に同席しているが⁽³⁵³⁾、シュルツェから委員会を探る役目を与えられていたのだろう。ダマーもあとで、彼はスパイだったのではないかと疑っている⁽³⁵⁴⁾。それはともかく、3月19日にシュルツェと直接会って話したレーヴェは、シュルツェが委員会について語ったことを急いで3月20日付の手紙でダマーに知らせている。

彼〔シュルツェ＝デーリチ〕はあなた方に対して怒っており、ライプツィヒ中央委員会を追い出したがっている。そちら〔ライプツィヒ〕と委員会自体での分裂を期待しており、オフエンバハやプフォルツハイム、ニュルンベルクに向けてラサールの小冊子反対の合図を送るだろう⁽³⁵⁵⁾。

さきに見たニュルンベルク労働者協会の抗議文は、このシュルツェの指示で作成されたものらしい⁽³⁵⁶⁾。それにシュルツェの「ラサールの小冊子反対の合図」もまた、事前集会の開催を前提にしたものようだ。1863年1月初めにシュルツェはすでに、委員会から kongress 運動の指導権を取りあげる意思を固め、それを実行に移す場として、3月開催予定の kongress を考えていた。ライプツィヒ委員会が事前集会開催に同意したとの情報も当然得ていただろう。そして今回、3月17日の委員会決定の内容が伝えられ、シュルツェにとって委員会追放の場は、事前集会に前倒しされていたと思われるからである。

だが、シュルツェのラサールに対する「敵意」の噴出するのは、あとで見るように3月29日のベルリン労働者協会の集会において、それも直接には3月24日のライプツィヒ労働者集会の決定がきっかけだった。17日の委員会決定に対する怒りは直接には表面に出なかったのである。ライプツィヒ委員会の事前集会に関する態度不表明戦術はかなり成功したといえるだろう。

3月17日の委員会決定と事前集会をめぐる事情はこれくらいにして、つぎに3月24日の労働者集会を見ることにしよう。

b 3月24日の労働者集会と「ドイツ労働者協会」設立委員会の選出

3月24日のライプツィヒ労働者集会の議題は、委員会の急進派執行部が提案した、新綱領としての『公開返書』と kongress 運動の指導権放棄の承認、および「ドイツ労働者協会」設立委員会の結成だった。ここでは、この集会での決定が進歩党陣営のなかに引きおこした憤激を理解するために、ライプツィヒ委員会の存立と権限の正当性の問題をふり返っておこう。

ライプツィヒ委員会は、その存立と権限の正当性を2つの労働者集会から獲得していた。1つは、前年10月2日のライプツィヒの第1回労働者集会。委員会はそこから労働者委員会として生まれ、ベルリンでアイヒラーが立ち上げた労働者 kongress 運動への参加と国民協会への労働者階級の関与のために活動することに関してローカルな正当性を得ていた。もう1つは、前年11月2日のベルリン大労働者集会。労働者委員会はこの集会において、憲法紛争にお

ける進歩党支持を条件に、進歩党の有力政治家たち、とくにシュルツェ＝デーリチの権威の一応の承認の下に、アイヒラーの委員会に代わって、ベルリン綱領での kongress 運動推進のために活動する中央委員会としてのいわば全ドイツ的な活動の正当性を付与されたのである。

それ以後の経過もふり返しておく。委員会は、ライプツィヒにおいてしばしば公開の労働者集会を開き、活動を報告し承認を受けている。1863年1月半ばの第4回労働者集会では委員全員が信任された。地元のローカルな正当性は確保していたのである。これに対して全ドイツ的な活動に関して孤立しつつあった委員会は、さきに述べたように、いくつかの都市の労働者教育協会から求められた事前集会の開催に同意を表明していた。事前集会は委員会の活動の全ドイツ的な正当性を再検討する場だったはずである。

ところが、ライプツィヒ委員会は、事前集会の開催に同意するかたわら、2月10日にラサールに労働者運動のあり方に関する見解表明を要請した。そして、回答として得た『公開返書』を3月17日の会合において多数決で、ベルリン綱領に代わる新たな綱領として採択したのである。委員会のこの決定が有効になるためには、一方でライプツィヒの労働者集会によるローカルな承認、他方で kongress もしくは事前集会での全ドイツ的な承認が必要だった。委員会急進派は、敗北が確実な後者を回避して、前者のみで突破を図ろうとした。これが3月24日の第7回ライプツィヒ労働者集会である。

では、この労働者集会はどのように経過したのか。夜8時、集会には千人以上の労働者が集まり、ファールタイヒとダマーが議長に任命されて議事が始まった。ダマーは3月26日付の手紙で、「我々の集会は嵐のごとく進行しました⁽³⁵⁷⁾」と述べ、様子をラサールに報告している。このときのダマーには事前集会はもはや問題ではなかったようだ。彼はまず『公開返書』を読みあげて解説し、労働者集会に至る経緯と委員会からの提案を労働者につぎのように示したという。

我々は最後にはまったく孤立してしまい、それで彼[ラサール]に手紙を書い

た。すると彼は、 kongress のために立てられた綱領を退け、ドイツ労働者協会の設立を求めた。委員会は彼の見解に賛成し、当然の帰結として委任権限を放棄した。これに対して今や、ライプツィヒの労働者諸君も、同様に彼の見解に賛成し、ドイツ労働者協会設立委員会を選出するよう求められているのだ、と⁽³⁵⁸⁾。

労働者集会については、3月27日付の地元紙『ドイチェ・アルゲマイネ・ツァイトゥング』が載せた記事のほうがダマーの報告よりもずっと詳しい。それはライプツィヒ委員会にかなり好意的な記事で、以下、これにもとづいて労働者集会の様子を見ていく。

記事によれば、委員会に対する反対論を展開したのはいく人かいる。そのなかの1人、元委員のドルゲは、さきにロースメスラーの方針に同意しながら、ラサールの小冊子に賛成するのはおかしいと述べて、新方針の断念を委員会に迫った⁽³⁵⁹⁾。ロースメスラーも発言している。彼は、旧委員会に代わって労働者 kongress を招集する新しい委員会を選出する必要があると主張したという⁽³⁶⁰⁾。最も激しく反対論を展開したのは、進歩党支持派のシルトバハという医師だった。しばしば野次で中断されながらも、彼は、進歩党全体に挑戦するラサールの文書は「きわめて有害」だと述べ、労働者協同組合に対する国家援助論や、所得階層別の人口統計の利用についても問題点を指摘した。さらには、新しい労働者協会の設立方針には、「分裂をもたらす点で祖国の将来に対する犯罪だ」という非難を投げつけた⁽³⁶¹⁾。

ここで注目すべきは、シルトバハが展開したような『公開返書』の全面的批判に対して、議長すなわち委員会執行部が、「当面問題なのは普通選挙権であって、ラサールの主義主張の何もかもに立ち入ることではない⁽³⁶²⁾」と釘を刺していることだ。1ヶ月前にツィーグラウが感じたのと同様、ダマーらにとっても小冊子の社会的部分の議論は、当面の獲得目標の妨げだった気配である。執行部は労働者集会の議事の冒頭ですでに、『公開返書』のなかの普通選挙権の主張および、それを有効ならしめる「全域的なドイツ労働者協会」の設立に議論

を限定する旨を表明していたのである⁽³⁶³⁾。

委員会執行部によれば、ラサールの小冊子が労働者にプロイセン進歩党と関係絶つことを求めているのは、進歩党が綱領から普通選挙権を抹消しているためである。執行部は、普通選挙権を含む1849年のフランクフルト帝国憲法を前年9月に承認した国民協会は、ラサールによって攻撃されていないことも指摘する。だが、労働者を「精神的な名誉会員」としてしか扱わない国民協会には不満であり、普通選挙権のための「ドイツ労働者協会」を、「国民協会の方式に倣って」、いわば労働者の国民協会として創設することをライプツィヒの労働者たちに提案した、というのである⁽³⁶⁴⁾。

委員会執行部のこの提案は、ファールタイヒとダマーを含む12名の「ドイツ労働者協会」設立委員候補者リストとともに票決にかけられた。『ドイチェ・アルゲマイネ・ツァイトゥング』の記事は、「全域的な労働者協会の創設に反対を表明したのはごく少数のみ。提案された新委員会も採択された⁽³⁶⁵⁾」と報じたのだが、ダマーのラサールへの報告によると、具体的な票数はこうだった。

1350人ほどの労働者が出席して、あなたの小冊子、協会に反対票を投じたのは2人のみでした。我々のきわめて急進的な候補者リストは、5人の反対で通過しました⁽³⁶⁶⁾。

おそらく委員会急進派は、3月17日の会合以降、ライプツィヒの労働者たちに、ラサールの小冊子支持と24日の労働者集会への参加を精力的に働きかけたのだろう。1350人はそれまでのライプツィヒ労働者集会の人数よりもかなり多い。労働者集会の圧倒的多数による委員会案承認は、ライプツィヒでたちまち強い非難を呼びおこしたようだが、執行部は楽観的だった。26日付の手紙のなかでダマーはラサールに報告している。

我々は勝利しました。ブルジョアたちの中での憤激はものすごいものです。しかし、ブルジョアたちが彼らの崇拜するシュルツェを来させたとしても、

当地の労働者たちの間で彼が浸透することはありません⁽³⁶⁷⁾。

現実にはダマーの見込みどおりには行かなかったが、その点はあとで述べよう。それよりもここでつぎに、真っ先に見なければならぬのはベルリンにおける反応、ライプツィヒ労働者集会の決定に対するベルリン労働者協会の反応である。1つは、ベルリン労働者協会は、シュルツェ＝デーリチらの要請で労働者協会という形をとっていたものの、コングレス運動の地方委員会の任務を降りていたわけではなかったからだが、それよりももう1つの理由が重要である。ベルリン労働者協会の会員集会でシュルツェ自身がいち早く『公開返書』批判を展開したことだ。つぎにこれを考察する。史料はふたたび進歩党主流派系新聞、ベルリンの『フォルクス・ツァイトゥング』である。

c シュルツェによる『公開返書』批判——ラサール・バッシングの開始

『フォルクス・ツァイトゥング』は3月28日に、ライプツィヒ労働者集会に関する記事を書いている。だが、これはまだラサール・バッシングの開始とはいえない。なぜなら、その記事は、さきに紹介した、『ドイチェ・アルゲマイネ・ツァイトゥング』掲載の、ライプツィヒ委員会急進派に好意的な記事をそのまま転載したものだったからだ⁽³⁶⁸⁾。とはいえ、『フォルクス・ツァイトゥング』がラサールの名前の入った記事を掲載したことは、それまで極力彼の名前を忌避してきたこの新聞にとって、自由主義左派・進歩党陣営にとって3月24日のライプツィヒ労働者集会の決定がいかにも「重大事件」だったかを物語っている。

さて、『フォルクス・ツァイトゥング』の最初のラサール非難記事は、4月2日に掲載された。それは、3月29日の日曜日に開かれたベルリン労働者協会の会員集会の様子を伝えたもので、集会はシュルツェ＝デーリチの連続講演の最後の回にあっていた。奇しくもシュルツェにラサール・バッシングの幕を切って落とす役が回ってきたのである。記事によれば、3月29日の集会には多くの下院議員などの来賓も臨席し、相当数の労働者会員が集まったようだ⁽³⁶⁹⁾。

集会はディトマンのあいさつで始まった。そのなかで発された「一種の革命」という言葉は、3月24日のライプツィヒの決定から彼が受けた衝撃とともに、いくばくかの動揺も表しているように思われる。記事はこう伝えている。

議長ディトマン氏は、ライプツィヒの労働者の中央協会においていわゆる一種の革命が勃発し、そのため中央委員会そのものが解散する事態となったことに注意を喚起して、つぎのように述べた。このことは、ベルリンに関する自立的な協会として創設するか、ドイツに関する中央協会として創設するかするためには、当地の協会も地方協会としては解散せざるをえないがゆえに、重要なことだ。いま示した離反はフェルディナント・ラサールの文書によって引きおこされたもので、この文書についてはシュルツェ＝デーリチ氏をもっと詳しく講演のなかで立ち入ってくれるだろう、と⁽³⁷⁰⁾。

ディトマンだけでなく、一般の会員たちにとっても、シュルツェがどんな話をするか、期待は大きかったと思われる。シュルツェが早速演壇に登った。演題は以前から予定されていた「勤労諸階層の境遇改善のための実際的手段」。彼はこの題目で協同組合のための自分の活動の成果を誇り、消費組合とそこから生み出された生産組合の利点を強調した。さらに、当時のドイツに前貸組合450、原料組合150、消費組合30から40、準備中のものを含めて生産組合15と、協同組合の数と、それらが動かしした金額とで活動実績を示した⁽³⁷¹⁾。

だが、シュルツェはすぐに『公開返書』批判に移る。記事ではこれが3分の2以上を占める。この批判は、シュルツェがラサールの存命中に小冊子に直接言及したほとんど唯一のものであり⁽³⁷²⁾、しかもラサールに対する全ドイツ的なモラル・パニックの劈頭に登場するものなので、多少立ち入って見ておく必要がある。

シュルツェは、ラサールに対する「敵意」を抱きながらも、それをいきなり噴出させてはいない。この小冊子は「私に社会的な誤りを避けるための歓迎すべき拠り所を提供してくれる⁽³⁷³⁾」と余裕を見せる。いかにも「道徳事業家」ら

しく、自分を支持する労働者たちに対して、小冊子の「社会的な誤り」を利用して、堅持すべき価値や秩序、規範を、再確認させようとするのである。これはこれでモラル・パニックの1つの現れだろう。

最初にシュルツェが取りあげるのは、『公開返書』の政治的部分における進歩党批判への反駁である。彼は憲法紛争における進歩党の実績と勝利の見通しを示している。「つぎの時期には諸君は、進歩党が無駄に闘ってはならず、信念を貫いてきたことを見ることになる。諸君は、諸君が思っているよりも近い時期にこの闘いの帰結をもつことになるだろう⁽³⁷⁴⁾」と。彼は普通選挙権の問題にも言及する。「諸君はまだ普通選挙権をもっていない。しかし諸君、この普通選挙権のために闘っているのは誰なのか。それは私の友人たちと私、諸君が議席を委ねている進歩党の者たちだ⁽³⁷⁵⁾」と。喝采もおこる。普通選挙権を含む1849年のフランクフルト帝国憲法を国民協会が統一ドイツのモデルとして採択したことが背景にあるのだろうが、ここに見られるのは、ラサールによる普通選挙権の強烈な提示をかわしながら、それを進歩党への支持につなげようとするシュルツェの老獪な政治家としての一面である。

じっさいシュルツェは、「社会問題は政治問題よりも高次である⁽³⁷⁶⁾」として、労働者には普通選挙権よりも「勤労諸階層の境遇改善」を優先することを求め、普通選挙権要求から巧みに労働者を遠ざけようとする。そして彼が労働者聴衆に確認させようとするのは、進歩党と労働者との一体感である。自分は諸君をドイツ進歩党のきわめて重要な部分だと思っている。諸君が進歩党の精神において選挙を行なってきたからだ。「私は問う、進歩党とは諸君自身以外の何であるか。諸君がもしもそうでないなら進歩党はどこにあるというのか⁽³⁷⁷⁾。」

シュルツェは『公開返書』の社会的部分の批判に議論を移す。シュルツェが最初に取りあげるのはラサールのベルリン綱領の扱い方である。営業の自由と移住の自由の要求をラサールが時代遅れだとして一蹴するだけに対して彼は、ツンプトや身分制に執着する人たちの勝手にさせ、「我々は懐に手をしまい込んでいていいのか」と、ラサールの扱い方に疑問を投げかける。ただしシュルツェは、貯蓄金庫や傷痍・疾病金庫については、限定的な意義しか認めないラ

サールにむしろ賛成する。労働者がこうした施設全部にお金をつぎ込むと、総額は莫大なものになって、「多くの者たちは老後を準備するために、しばしば元氣な年齢での飛躍を断念せざるをえなくなる」というのである⁽³⁷⁸⁾。

だが、シュルツェが最も力を入れて『公開返書』批判を展開したのはやはり、その協同組合に関する議論である。講演の半ば以上がこの問題に割かれている。彼はまず、自分が生産組合を非難しているというラサールの誤りを指摘し、自分はむしろ「生産組合をすべての企ての頂点に置いてきた」と述べ、「私の努力の頂点にあるのは営業の自立である」ことを強調する。さらに彼は、ラサール氏は「ごく小さなことでも実現しただろうか」と、この分野でのラサールの発言資格を問題にし、自分の経験と実績を対置する。「私は15年間仕事をしてきて、仕事にいくばくかの喜びをもっているということができる。なぜなら、自分が追求してきたものが繁栄していくさまを見てきたからだ」と⁽³⁷⁹⁾。聴衆がこれに大きな拍手を送ると、ラサールの協同組合構想の批判に取りかかる。

シュルツェによれば、「我々が欲しているのは自己援助だが、ラサール氏は国家援助を欲し、そのためには普通選挙権以外には何も必要ではなく、これらすべてのことを実行する国家をそれによって創り出すという⁽³⁸⁰⁾。」しかし、シュルツェはやはり普通選挙権の問題を慎重に議論から遠ざけて、国家援助による生産協同組合の創出というラサールの施策とその根底にある姿勢をくり返し非難する。それは理論的な批判よりも道徳的非難に傾く。曰く、ラサール氏のやり方は、「きわめて達成困難なことをすぐさま手に入れようとし、簡単なことを顧みないすべての人たちと同じやり方である⁽³⁸¹⁾。」次第に言葉に「敵意」がにじみ出てくる。「すべてを瞬時に達成しようとするあの自称世界改造者、これが、諸君、社会主義のインチキ治療師なのだ⁽³⁸²⁾。」

この言葉は、筆者がさきに指摘したラサールの人物像の山師的側面を図らずも言い当てている。だがここではむしろ、シュルツェの提示するラサール像が、モラル・パニック論で「民衆の悪魔⁽³⁸³⁾」といわれる、社会の秩序や規範を脅かすものとして攻撃の標的となる人びとのシンボル・イメージに近いことに注意を喚起したい。労働者聴衆もシュルツェのこの発言に喝采を送ったのである。

シュルツェが国家援助の協同組合というラサールの提案にこのように強い非難を浴びせかけるのは、もちろんそれによって彼自身の協同組合の企ての堅実さを際立たせるためである。「私は自分に言い聞かせている。不名誉な破産に陥らないためには最も大きなことから始めてはならない、頂点に到達するには徐々にかつ根本から務めなければならないと⁽³⁸⁴⁾。」自助と自立の道の正しさも強調される。1848年のフランスで国家援助によって生み出された何百もの労働者の協同組合のほとんどが消滅したのに対し、イギリスでは自助にもとづく協同組合が労働者のなかから成長していることが指摘される⁽³⁸⁵⁾。ドイツの事例ももちろんあげられる。彼は自身の出身地、小都市デーリチの製靴工たちが、協同組合という小さな始まりから、前年のロンドン工業博覧会に出品して賞牌を獲得するまでになった例を示し、「他人の足で企業家になることはできない。そこでは自分の足でやらなければならない⁽³⁸⁶⁾」と説くのである。

最後に2つの点を指摘しておきたい。1つは、『公開返書』批判のなかでシュルツェがふれなかった点である。それは、ラサールが労働者として問題にしたのが、原理的に大工業の工場労働者だったことだ。これに対してシュルツェが問題にしたのは、原理的に大工業との競争に晒された手工業者あるいは手工業的労働者だった。シュルツェの説く自助と自立の道徳世界には、大工業の工場労働者のみの世界を想定することができなかつたのだろう。もう1つは、シュルツェが講演の最後のあたりで述べている、ラサールに対する「敵意」をかなりむき出しにした非難の論点である。彼はいつている。

我々は大きな政治的決断の時代に生きている。そこでは確乎たる団結が必要である。ところが、ラサール氏がやっているように、分裂を引きおこそうとする者は、反動の自覚的な手先そのもの以上に、反動によく奉仕することがあるのだ⁽³⁸⁷⁾。

この言葉に喝采で応えたベルリンの労働者聴衆に対してシュルツェは、分裂を引きおこした者が「反動に奉仕」した例を、1848年革命の経験からもち出す。

「敵意」はさらに露わになってくる。

1848年には同じ分裂が運動のなかに投げ込まれ、赤い妖怪が臆病な者たちを権力と軍隊の専制の腕のなかに連れて行ったのだ。それはパリの6月戦闘を引きおこし、自由な力は皇帝[ナポレオン3世]という怪物の犠牲に供され、皇帝の軍力は夢魔のごとくヨーロッパ諸国の上のしかかって、工業の興隆を阻んでいる。労働者がこの無益な見方に背を向けるか向けないうちに、ふたたびこの不幸な分裂が投げ込まれている⁽³⁸⁸⁾。

「パリの6月戦闘」とは、1848年2月革命から生まれた第2共和政下のパリでおこった労働者の反政府反乱のことで、フランスだけでなくドイツにおいても労働者と社会主義・共産主義に対する強い警戒心を自由主義派の陣営に呼びおこした事件である。シュルツェはラサールの登場のなかに、自由主義派を反動に追いやったと彼が考える「赤い妖怪」、すなわち社会主義や共産主義の再出現を見てとって、自由主義派と労働者に間に「不幸な分裂」を投げ込むラサールへの警戒心を煽ったのである。

もっとも、シュルツェはすぐあとの個所で、「私はそれ[分裂の投げ込み]はうまくいかないだろうと思っている。よりよい見解がすでに根を張っていると確信しているからだ⁽³⁸⁹⁾」と述べる。これは彼がベルリン労働者協会では、すでに見たように、自分を崇拜する労働者たちの熱狂的な支持をあてにすることができたからだろう。彼は講演をつぎの言葉で締めくくる。

諸君、諸君は自分たちがどちらの側につくのか、誰と行動を共にするのか、決断しなくてはならない。諸君が私と行動を共にすることを決断したとするならば、私としても諸君に奉仕する努力を尽すつもりだ⁽³⁹⁰⁾。

ベルリン労働者協会の聴衆は、シュルツェの講演に「嵐のような喝采と轟くような万歳」で応えたが、協会としての仕事は喝采と万歳で終了したわけでは

なかった。「労働者の使徒」シュルツェみずからが、自分をとるかそれともラサールをとるのかと迫った。いや、事実上自分に対する支持と「民衆の悪魔」ラサールに対する反対を決定することを求めたのである。協会はこれに応える必要があった。それは4月19日の労働者集会で行なわれた。ラサールはこの集会に間接的ながら介入を試みている。つぎにこれを見てみよう。

d 4月19日のベルリン労働者集会とラサールの敗北

4月19日のベルリン労働者集会とラサールの介入の試みを考察するまえに、これ以後の叙述のために2つのことをいっておく。第1は、ラサールの挑戦が成功する条件についてである。「ドイツ労働者協会」を大規模に出現させようという彼の挑戦が何ほどかの成功を収めるためには、まずなりよりも、ドイツのできるだけ多くの都市の労働者集会なり労働者教育協会なりで正式に、『公開返書』と「ドイツ労働者協会」の結成が綱領として承認される必要があった。ライプツィヒ労働者集会での承認は、まだローカルな正当性の獲得にすぎなかったし、まだライプツィヒでの労働者の獲得の目途がたっただけだった。全ドイツ的な規模での正当性の承認と労働者の大量獲得が必要だったのである。このための活動はおもにライプツィヒの結成委員会の仕事だったが、ラサールも、1848年革命以来多少の影響力を有していたラインラント諸都市のかつての同志に働きかけている⁽³⁹¹⁾。彼はまた、権威ある学者や知識人に対して、『公開返書』の議論や政策に支持を表明してくれるよう依頼していた⁽³⁹²⁾。これらの活動がどのような成果をあげたかについては、のちほど示そう。

第2に、いま述べた成功の条件の1つでもあるのだが、ラサールにとってベルリンでの労働者の大量獲得が特別の重要性をもっていたということだ。プロイセンの首都が彼のドイツ革命構想において重要な位置を占めていたことは別のところですでに論じたので⁽³⁹³⁾、ここで立ち入らないが、その構想との関連で彼は、さきに述べたように、自分を長とする「全ドイツに関する総労働者の協会」を創設して、その本部をベルリンに置く計画を、ライプツィヒの急進派との接触以前から抱いていた。じっさいに設立された「ドイツ労働者協会」

の本部がライブツィヒになったにせよ、設立以後も彼にとってベルリンの重要性は変わらなかった。彼は1863年4月にベルリン労働者協会への介入を試みて失敗したあと、10月末から12月にかけてもう一度、ベルリンで労働者の大量獲得の挑戦を試みる。これもまた失敗に終わり、彼にとってほぼ決定的な挫折のきっかけになる。だが、それはまだ先の話。いまは4月の事態を見なければならぬ。

ベルリン労働者協会は3月29日のシュルツェの提起を受けて、4月12日に会員集会を開いている。『フォルクス・ツァイトUNG』の記事によれば、『公開返書』に関する声明の採択もすでに議題の1つに入っていたが、この集会では他の案件の議論が長引き、声明の採択は19日まで延期された。注目すべきは、そのさい議長ディトマンが、「一面的な批判という非難を避けるために、そのときまでに対象を熟知する」よう注意を促し、そのためにミュラーなる人物がラサールの小冊子を会員用に安価に入手することを引き受けたことだ⁽³⁹⁴⁾。協会資金からの支出も承認された。記事は最後に、シュミットという人物が作成した、ラサールの原理に強く反対し、シュルツェ＝デーリチの原理を支持する私的な決議案が読みあげられ、大きな拍手で迎えられたことを伝えている。しかし、編集部はこれに付記して、「提案者が編集上の変更を留保したため、この決議を文言どおりには報じない⁽³⁹⁵⁾」旨を述べている。決議のラサール非難のなかに、編集部には不相当と思われる文言があったのかもしれない。

ラサールはベルリン労働者協会の動きを注視していた。どのような形で介入が可能か、様子を覗っていたようだ。彼は4月12日の協会の集会についてその日のうちに情報を得て、同日付でダマーあてに手紙を書いた。そこには19日のベルリン労働者協会の集会に対する多少の期待が記されている。

当地の労働者の今日の会合では、さしあたり私の小冊子を読むことが決定された（私はそこにいなかった）。大量の注文が届いている。そのためすぐにそちらに2千部の〔送付依頼〕電報を打った。すぐに遅くとも火曜日〔14日〕にこちらに届いてもらわなくてはならない。というのは、すでに次の日曜日〔19

目]には、こちらでは労働者協会が最終的に決定するからだ。私にはシュルツェの勝利が完全に確実だとは思えない⁽³⁹⁶⁾。

ラサールの期待は、何か具体的な根拠というよりも、『公開返書』という「絶対的手段」の労働者獲得効果に対する自信から来るものなのだろう。ところが、彼にとってきわめて大事な4月19日の労働者集会に、ラサールみずから乗り込んで行ってはいないのだ。さきの準備集会のときと同様、消極的である。翌20日には1月16日の『特別の連関』裁判のさいに訴えられた検事侮辱罪での審理が控えてはいたものの、それが理由ではないようだ。なぜ行かなかったのか、その理由を、4月22日付の「声明」のなかで彼自身が公表している。

私は、この集会に行った私の知人たちのうちの2人に、動議を提出してくれるよう依頼していた。少なくとも、最近コンサートホールで労働者に対して行なわれたシュルツェ＝デーリチ氏の講演における反論に対して私の側で応答しなければならないことを聴いてもらうために、日取りが決められる会合に私を呼ぶことを決議するよう、労働者集会に要求する、という動議である。私は、要請されないで出席したくはなかった。なぜなら、このような要請がある場合にのみ、静かに聴いてもらう確かな保証があると思われるからだ⁽³⁹⁷⁾。

ラサールはライブツィヒ委員会からの見解表明の要請以前にも、ダマーあてに同様のことを伝えたことがある。「ライブツィヒの人たちのところに私が押しかけようとしたという誤った外見だけは、私は避けなければならない。この理由だけは私にとってまったく決定的なものだ⁽³⁹⁸⁾」と。請われてもいないのに自分から押しかけていくようなことは、彼の自尊心が許さなかったのだろう。そのかわり、ラサールは2人の知人をつうじてベルリン労働者協会に間接的な介入を目論んだのである。

この2人の知人のことはあとでふれる。問題は4月19日のベルリン労働者

協会の集会である。小論の冒頭近くでモラル・パニックについて、「社会一般に受容されている文化や規範に挑戦したり、逸脱したりする人々を、社会の秩序や公共の利益を脅かすものとしてやり玉にあげ、冷笑・非難・憎悪・激怒を一斉に浴びせる標的に仕立て上げてしまうヒステリックな大衆心理現象」という、社会学辞典の説明を引用したが、4月19日の労働者集会はこの「ヒステリックな大衆心理現象」の典型のような様相を呈したのである。権威たるシュルツェ＝デーリチがさきにラサール攻撃を許可し、手本を示して煽っていたためだろう。

『フォルクス・ツァイトゥング』の記事によれば、集会には「きわめて多数の参加があった」という。最初に小さな議題を片づけたあと、早速本題の『公開返書』に関する討論に入った。記事には3人の批判発言が紹介されている。

1人目のバルドウ氏という人物は普通選挙権について警告した。「普通選挙権は、労働者を欺こうとする場合にすでにしばしばしば約束された。」ラサールは争いの種を労働者たちの間に投げ込んで、彼らを制圧しようとしている、と。そして、労働者はだれでも普通選挙権に賛成するだろうが、最良なのは平穏な方法で、進歩党と手を携えてそれを受け取ることだ」と主張した。2人目のアンドレなる人物は労働者に向かって、諸君はシュルツェ＝デーリチを信頼し、「せいぜい若干の演説しかできないような指導者には頼らないように」と呼びかけて、拍手をもらっている⁽³⁹⁹⁾。

3人目は、ベルリンの有名な機械工場ボルジヒの従業員だというハーゼなる人物。集会の記事の大半はじつは、このハーゼによる『公開返書』およびラサール個人への非難や嘲笑で占められている。彼は、「ラサールの著作が嘘っぱちと馬鹿げたことこの山だということを証明しよう⁽⁴⁰⁰⁾」と前置きして演説を始める。いくつか特徴的な個所を紹介しよう。

ハーゼはまず政治的な点に関していっている。ラサール氏は諸君を、進歩党の「追従者」と呼んでいるが、彼は諸君を「彼自身の追従者」にしたがっているだけだ。進歩党の意気地のなさを非難しているが、「どうしてラサール氏は厚かましくも、かつて反動勢力に投獄されたシュルツェ＝デーリチやヴァル

デク [進歩党の有力議員] のような人びとを意気地のなさで責めることができるのか。こんな男はくそ食らえ」というと、嵐のような拍手がおこった。さらにハーゼはラサールの「頭の良さ」を皮肉ったり、「慇懃な身のこなし」や「ズボンのポケットに両手を突っ込んだ」格好など、おそらくはかなりよく知られていたラサールの仕草をからかったりして拍手喝采をまきおこしている⁽⁴⁰¹⁾。

ハーゼの演説は社会的問題にも及んだ。彼はシュルツェの講演に倣い、協同組合に関しては、「我が尊敬するシュルツェ＝デーリチ」の、「誠実な勤勉さをもって小石を積み上げて組立てていく」やり方を称賛し、「上から大規模に一気に建てようとする」ラサールの提案を非難した。そしてラサールが提示した、労賃の上昇で「労働者の状態が改善されると繁殖が増加し、働き手の供給の増加によって労賃がふたたび以前の水準に落ちる」という賃金鉄則については、「諸君、繁殖の衝動を、稼ぎが多いか少ないかで左右させる者がいるだろうか」と茶化して聴衆の爆笑を引きおこし⁽⁴⁰²⁾、不在のラサールを笑いものにしたのである。

ハーゼはラサールの人口統計の利用や国家援助の議論に対する批判も展開したのだが、『フォルクス・ツァイトUNG』の記事は突然そこで紹介をやめてつぎのように記す。演説者は「そのあとシュルツェ＝デーリチとの比較でラサール氏の人格の特徴づけに移ったが、我々はそれをここで再現するつもりはない⁽⁴⁰³⁾」と。どうやらハーゼは、編集部がそのまま伝えるのを控えざるをえないほどの人格攻撃を行なったらしいのだ。いったいどんな人格攻撃だったのか。

メーリングは『ドイツ社会民主主義史』のなかで、その一端と思しきものを伝えている。別の新聞の記事に拠ったのだろうが、こう書かれている。

この愉快的進歩党の闘士 [ハーゼ] は語った。ラサールはたしかにラインラントの陪審員によって手文庫窃盗の告発を免れて無罪となったが、最もものわかりのよい裁判官ですら「ラサール氏」には手を焼いていることは周知の事実であり、さらに、ラサールがある女性の運命にどの程度巻きこまれているのかまだ明らかではないが、最近彼の近所でこの女性に関連して 25 ターラー

のための強盗殺人がおこった、と⁽⁴⁰⁴⁾。

最後の個所などはひどい誹謗中傷だが、ともかく最後まで『公開返書』非難とラサール攻撃を続けたハーゼの演説を、ベルリン労働者協会の聴衆は嵐のような拍手で迎えたのである。では、この集會に参加していたラサール支持派の者たちはどうしていたのか。

ラサールが動議の提出を依頼していた2人の知人とはレーヴェとブーハーだったらしい。ラサールは4月22日付の「声明」のなかで、集會ではラサール支持の「発言するそぶりを見せるだけですぐに野次り倒された」という2人の言葉を伝えている。またこの「声明」によれば、2人は、ラサールに頼まれていた、集會がラサールを呼んで反論させるよう決議するという動議の提出を、「嫌気と憤慨のあまり」見合わせてしまったという⁽⁴⁰⁵⁾。メーリングの記述では、彼らは、「奴を叩きのめせ、放り出せ、という理不尽な論拠で沈黙させられた⁽⁴⁰⁶⁾」とされる。「敵意」の噴出をまえにして怖気づいたのだろうか。

しかし、『フォルクス・ツァイトゥング』の4月19日の集會に関する記事によると、討論の最後あたりでアイスナーというラサール支持派の医師が発言している。メーリングの伝える情報も加えて紹介すると、アイスナーは、集會はひとまず社会的問題に関する判断を控えて、少なくとも普通選挙権に賛成を表明する、との決議案を提出したという。『公開返書』の社会的部分が普通選挙権というラサールの中心的主張の妨げになっていることは、この医師からも認識されていたようだが、アイスナーの提案は簡単に退けられた⁽⁴⁰⁷⁾。

4月19日のベルリン労働者協会の集會は、討論のまとめのあと、議長ディトマンとシュミットの起草による決議文が——記事によると、「反対票を集計したにもかかわらず⁽⁴⁰⁸⁾」——全員一致で採択された。決議文はつぎのとおり。

労働者協会は1863年4月19日の会合において、熟議ののち、またライプツィヒ中央委員会あてのラサール氏の返書のその政治的部分の原理を、普通・平等な政治的選挙権に関して承認するのは、人民全体が政府とわたりあつ

ている原理上の闘争において固く団結しなければならないが故に、現在は得策でないように思われることを考慮し、また労働者には自己援助と自己責任のなかに、国家社会において相応しい地位を占める手段が与えられていることを考慮して、つぎのことを表明する。

- 1) ベルリン労働者協会で行なわれた講演においてシュルツェ＝デーリチ氏が述べた原理を堅持し、その原理を実行する。また、
- 2) ライプツィヒ委員会は一方的に自身の地位を放棄したために、今後これをドイツの労働者運動の指導的機関として承認しない⁽⁴⁰⁹⁾。

ベルリン労働者協会はこの決議によって、協会が完全にシュルツェ＝デーリチの影響下にあり、そこにラサールの影響の入る余地のないことを公に示しただけではない。ライプツィヒ委員会の後継組織としての「ドイツ労働者協会」設立委員会の全ドイツ的な活動の正当性をも否認したのである。

ところで、ラサールはベルリンにおいてたんにシュルツェ＝デーリチとベルリン労働者協会の会員たちから非難されただけではなかった。その非難を大衆に伝える自由主義派系の諸新聞が日々数万部の規模で彼に襲いかかっていたことを忘れてはならない。『フォルクス・ツァイトゥング』だけでも発行部数は約3万だった。以前はラサールに好意的だった『ベルリーナー・レフォルム』約3千部も、『公開返書』以降は反ラサールに転じた。その他の主要な自由主義派系新聞も反ラサールの立場だったと推測される⁽⁴¹⁰⁾。

これに対してラサールがベルリンにおいてこの時点で動員できたのは、4月19日の労働者集会が示すように、数名の知識人だけで、労働者のあいだに支持者を見出していなかった。もちろん彼には自由に使える日刊新聞などもなかった。つまり、少なくともベルリンでは、進歩党陣営による非難・攻撃の激しさと、この陣営に脅威とみなされたラサール陣営のじっさいの勢力との間には明らかに、モラル・パニックの指標の1つである「不均衡」が存在したのである。

話をもどそう。4月19日の労働者集会をめぐるのは、ラサール陣営とベル

リン労働者協会および『フォルクス・ツァイトゥング』との間で応酬が続いた。ラサールが4月22日付の「声明」をベルリンの諸新聞に送り付けて掲載を求めたのに対して、彼を無視の対象から攻撃対象に格上げしていたこの自由主義派系の新聞は24日にこれを掲載した。そのなかでラサールは、4月19日の労働者集会における発言妨害についてベルリン労働者協会に抗議するとともに、なおもシュルツェに対する挑戦の意欲を示したのである。「私はいまでもなお、労働者集会に出席して、集会に私の見解を報告し、さらに労働者集会から求められれば、シュルツェ氏の抗弁に対して私の見解を擁護する用意がある⁽⁴¹¹⁾。」

『フォルクス・ツァイトゥング』編集部はラサールの「声明」に付した注記のなかで、この「声明」への必要な対応はベルリン労働者協会の執行部に委ね、たんに19日の事実経過を述べるとして、事実上の反論を行なっている。紙面を自由に使える者の強みである。「我々はただ事実として、議長がはっきりと集会に対して、発言者たちは小冊子に賛成か反対かを口にするように要求したが、ラサールの見解を擁護するために発言を求めた者はいなかったことをいっておきたい。レーヴェ氏はラサールに対する若干の人格上の発言をたしなめようとしたただけだった⁽⁴¹²⁾。」最後に編集部は勝ち誇ったように、ラサール陣営の「臆病さ」について付け加えた。

出席していたラサールの支持者たちには勇気が欠けていたようだ。彼らがあとになって自分たちの臆病さを、集会のテロリズムと称するもので言い訳しようとしても、彼らの立場は改善されない。少なくとも彼らは、自分たちがあくまで静穏に発言を終えられるような試みをすべきだった⁽⁴¹³⁾。

4月28日付の『フォルクス・ツァイトゥング』は、ベルリン労働者協会が開いた26日の日曜集会の記事を載せている。そこには議長ディトマンが19日以後行なった旧ライブツィヒ委員会との手紙の上での応酬、19日の集会の発言妨害に対するブーハーの疑念への対応、労働者協会としての存続、さらにはシュルツェ＝デーリチの原理にもとづく労働者運動の中央委員会を適切な都

市に設ける発案などが議論されたことは報じられているが、ベルリン労働者協会でのラサールの弁明要求が検討された形跡はない。決定済みの問題と見なされたのだろう。だが、それに関連して、26日の集会の議論の記事で注目すべきは、ディトマンとハーゼが、「前の日曜日[4月19日]に採択された決議によって自分たちがあたかも基本的に、普通・直接選挙権に反対を表明したかのようになったことに対して抗議した⁽⁴¹⁴⁾」と、そこに記されていることだ。普通選挙権の要求自体を否定することは、協会の幹部たちもためらわれたのである。

『フォルクス・ツァイトゥング』は5月1日、4月22日付のラサールの「声明」に対するディトマンの「反論」(4月28日付)を掲載した。4月19日の集会の発言妨害の疑念に関わる反論である。じつは集会にはあのアイヒラーが出席していて、自分に対する以前からの嫌疑を晴らしたいという場違いな発言をしたのだが⁽⁴¹⁵⁾、ディトマンは「反論」のなかでこう書いている。19日の集会では、議長は何度もラサール支持の発言者を促した。「奴を叩きのめせ」という声はただ1人の者から出ているだけで、それもアイヒラーのみに向けられたものであり、アイヒラーはいずれにしろラサール支持を表明しようとしてはいなかった⁽⁴¹⁶⁾」と。つまり、その怒号はラサール支持者たちに向けられたものではなかったというのである。付け加えておけば、ラサールの弁明要求はここでもやはり無視されている。

ラサールもそれ以上、ベルリン労働者協会に対して弁明の機会を要求することはなかったようだが、とにかくベルリン労働者協会への介入の試みに関しては、彼はほぼ完敗だった。『フォルクス・ツァイトゥング』は4月19日の労働者集会におけるラサールと支持者たちの敗北を報じた22日の翌日から、追い討ちをかけるように1面の社説欄に「煽動デマゴギー」と題するラサール批判論説を10回連続で掲載した。執筆はほぼ間違いなく編集人のアーロン・ベルンシュタイン⁽⁴¹⁷⁾。内容はシュルツェの立場からの『公開返書』の全面的批判である。

すでにシュルツェの講演などで見たことと重なる点も多いので、紹介は省略するが、この論説に関しては2つのことをいっておきたい。1つは、『フォル

クス・ツァイトゥング』が10回連続で1面に同じタイトルの論説を掲げたのはきわめて異例だったということだ。少なくとも、筆者が目を通した1861-1864年までの4年間では、このケースしかない。編集部にとってラサールが『公開返書』によっていかに無視できない存在になったかを示す事実である。

もう1つは、論説の初回に語られている、連続論説を掲載する経緯と動機についてである。論説によれば、編集部は、『公開返書』の刊行直後は、この小冊子は、ラサールのほかの似た内容の時論的な企てと同様、「学問的な点ではきわめて程度の低いものなので、専門家ならば誰でもそれを、デマゴギー性格のゆえに危険だと見なければ、とくに片づいたガラクタとして無視していただろう」と述べ、ジャーナリスティックな「この文書のひどい誤りと著者の煽動の企てに公然と反撃する」のは本紙の義務ではないと判断し、黙殺つもりだったという。危険だとは見なかったのだ。ところが、シュルツェ＝デーリチという権威が、「民衆の幸福のための熱心さに駆られて、公開の講演で反駁するという名誉をこの文書に与え、これを公の議論の対象にし」たことで、『公開返書』の「内容と本質について発言する義務を我々に課すことになった」というのである⁽⁴¹⁸⁾。ラサールに対するモラル・パニックは、やはりシュルツェの講演が呼び水となって噴出したようなのだ。

しかし、『フォルクス・ツァイトゥング』編集部がラサールに対するそれまでの黙殺を捨てて、いきなり通例にない大きな紙面を割いて批判を展開したのは、必ずしもシュルツェの講演だけがきっかけではなかったようだ。それが覗える個所を引用してみよう。論説は、ジャーナリズムには「許されること」と「許されないこと」の境界というものがある、としながら、ラサールが小冊子のなかで行なっていることについて、つぎのように述べる。

学問的にとくに間違いと認識されており、十分に説明され、十分に論駁されている間違いを、自分の発見としてもう一度もち出し、そのさい自惚れと傲慢さのあらゆる要素を総動員して権威に立ち向かうだけでなく、学問の裁きの場に自分の間違いをもち出して権威を納得させるようなことはさらさら

せずに、むしろ学問の資格ありとは見ていない公衆のほうにこの間違いを携えて赴く者は——この公衆を無条件に煽動へ唆して、ほかの見方はすべて撥ねつけながら自分の救済策を実行に移す者は——そのさい自分の幸福教義の実践的实现を人びとが追い求めるエネルギー源として、臆面もなく人びとの空腹に訴えることまでやる者は——そこまでやる者は、我々がここでいっている許されることの境界を踏み越える者である⁽⁴¹⁹⁾。

ベルンシュタインは『公開返書』から強く匂ってくるラサールの「自惚れ」や「傲慢さ」、あるいは厚顔さに腹を据えかねたのだろう。小冊子を「絶対的な煽動デマゴギー⁽⁴²⁰⁾」とすら非難する。だが、『フォルクス・ツァイトゥング』第1面のこの連続攻撃にラサールが直接反応した形跡はない。彼の気持ちはすでにフランクフルトに向かっていた。4月19日に開かれたフランクフルトとその周辺諸都市の労働者教育協会からなるマインガウ労働者大会が、5月17日にフランクフルトで開催予定の次回の労働者大会においてラサールとシュルツェの双方から意見を聴こうと、ラサールに講演を要請してきたからである。

[この稿続く]

注

(338) Lassalle an Dammer, 13. März 1863, in: Na'aman, *Die Konstituierung*, Dok.133, S.397.

(339) Dammer an Lassalle, 26. März 1863, *ebenda*, Dok.134, S.398.

(340) Austrittserklärung von August Dolge aus dem Zentralkomitee, 18. März 1863, *ebenda*, Dok.75, S.290.

(341) E. A. Roßmäßler, An die deutschen Arbeiter!, 28. März 1863, in: *AZ*, Nr.15, 12. April 1863. (N-Dok.141, S.405).

(342) Dammer an Lassalle, 23. Feb. 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.130, S.388.

(343) *Ebenda*.

(344) *Ebenda*.

- (345) *Ebenda*.
- (346) Das Centralcomité zur Berufung eines allgemeinen deutschen Arbeitertages, Deutsche Arbeiter! Brüder! in: *AZ*, Nr.9, Beilage, 1. März 1863. (N-Dok.132, S.390).
- (347) Offermann, *Arbeiterbewegung und liberales Bürgertum*, S.409 を見よ。
- (348) An die deutschen Arbeiter, in: Toni Offermann, Die Konstituierung der deutschen Arbeiterbewegung 1862/63—Bemerkungen zu einer neuen Dokumentenpublikation, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 16. Jg. (1976), S.560.
- (349) Lassalle an Dammer, 13. März 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.133, S.397.
- (350) *Ebenda*, S.395.
- (351) Der Arbeiterverein Nürnberg, Protest gegen das Vorgehen des leipziger Zentralkomites, in *VZ*, No.82, 9. April 1863. (N-Dok.96, S.328).
- (352) *Ebenda*, in *VZ*, No.82, 9. April 1863. (N-Dok.96, S.328).
- (353) Löwe an Dammer, 20. März 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.77, S.291.
- (354) Dammer an Löwe, ca.21. März 1863, in: *NBS*, Bd.5, S.121, Anm.3.
- (355) Löwe an Dammer, 20. März 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.77, S.291.
- (356) Na'aman, *Die Konstituierung*, S.816, Anm.1 zu Dok.96 を見よ。
- (357) Dammer an Lassalle, 26. März 1863, *ebenda*, Dok.134, S.398.
- (358) *Ebenda*, Dok.134, S.398.
- (359) Leipzig, 25. März 1863. Die gestrige siebente Arbeiterversammlung ... in: *Die Konstituierung*, S.845.
- (360) *Ebenda*, S. 845-846.
- (361) *Ebenda*, S. 845.
- (362) *Ebenda*, S. 845.
- (363) *Ebenda*, S. 844.
- (364) *Ebenda*, S. 844-845.
- (365) *Ebenda*, S. 846.
- (366) Dammer an Lassalle, 26. März 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.134, S.398. ラ

サールは3月28日付のダマーあての手紙のなかで、ベルリンではこの数字を「諸新聞のどれも載せていない」と書いている。Lassalle an Dammer, 28. März 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.135, S.400 を見よ。

- (367) Dammer an Lassalle, 26. März 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.134, S.399.
- (368) Arbeiter-Versammlung in Leipzig, in *VZ*, No.74, 28. März 1863.
- (369) Berliner Arbeiterverein, in *VZ*, No.78, 2. April 1863.
- (370) *Ebenda*.
- (371) *Ebenda*.
- (372) 1863年3月29日のシュルツェの講演は、Schulze-Delitzsch, *Capitel zu einem deutschen Arbeiterkatechismus. Sechs Vorträge vor dem Berliner Arbeiterverein, Leipzig 1863* の VI. Vortrag: die praktischen Mittel und Wege zur Hebung der arbeitenden Klassen (Schluß) に加筆・修正・整理されて収録されている。小論では集会の臨場感を伝えるために、『フォルクス・ツァイトウング』掲載のものを利用する。
- (373) Berliner Arbeiterverein (Rede des Abg. Schulze-Delitzsch. Fortsetzung), in *VZ*, No.81, 8. April 1863.
- (374) *Ebenda*.
- (375) *Ebenda*.
- (376) Berliner Arbeiterverein (Rede des Abg. Schulze-Delitzsch. Schluß), in *VZ*, No.82, 9. April 1863.
- (377) Berliner Arbeiterverein (Rede des Abg. Schulze-Delitzsch. Fortsetzung), in *VZ*, No.81, 8. April 1863.
- (378) *Ebenda*.
- (379) *Ebenda*.
- (380) *Ebenda*.
- (381) *Ebenda*.
- (382) Berliner Arbeiterverein (Rede des Abg. Schulze-Delitzsch. Schluß), in *VZ*, No.82, 9. April 1863.

- (383) このシンボル・イメージについては Stanley Cohen, *Folk Devils and Moral Panics*, 3rd ed., London and New York, 2002, p.37-38 を参照されたい。
- (384) Berliner Arbeiterverein (Rede des Abg. Schulze-Delitzsch. Fortsetzung), in VZ, No.81, 8. April 1863.
- (385) *Ebenda*.
- (386) Berliner Arbeiterverein (Rede des Abg. Schulze-Delitzsch. Schluß), in VZ, No.82, 9. April 1863.
- (387) *Ebenda*.
- (388) *Ebenda*.
- (389) *Ebenda*.
- (390) *Ebenda*.
- (391) たとえば Lassalle an Dammer, 28. März 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.135, S.401 を見よ。
- (392) たとえば Lassalle an Rodbertus, 10. April 1863, in *NBS*, Bd.6, S.321 を見よ。
- (393) この点についてはさしあたり、篠原敏昭「ベルリンとラサール」、石塚他編『都市と思想家 II』122-125 頁を参照されたい。
- (394) —Berliner Arbeiterverein, in VZ, No.86, 14. April 1863.
- (395) *Ebenda*.
- (396) Lassalle an Dammer, 12. April 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.140, S.405.
- (397) Lassalle, Erklärung vom 22. April 1863, in: VZ, No.95, 24. April 1863.
- (398) Lassalle an Dammer, 28. Januar 1863, in: *Die Konstituierung*, Dok.140, S.379.
- (399) —Berliner Arbeiterverein, in VZ, No.92, 21. April 1863.
- (400) *Ebenda*.
- (401) *Ebenda*.
- (402) *Ebenda*.
- (403) *Ebenda*.
- (404) Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, Buch 3, in *MGS*, Bd.2, S.65. 足利他訳『ドイツ社会民主主義史(下)』48 頁。

- (405) Lassalle, Erklärung vom 22. April 1863, in: VZ, No.95, 24. April 1863.
- (406) Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, Buch 3, in MGS, Bd.2, S.65.
足利他訳『ドイツ社会民主主義史(下)』48頁。
- (407) –Berliner Arbeiterverein, in VZ, No.92, 21. April 1863およびMehring,
Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, Buch 3, in MGS, Bd.2, S.65. 足利他
訳『ドイツ社会民主主義史(下)』48頁を参照せよ。
- (408) –Berliner Arbeiterverein, in VZ, No.92, 21. April 1863.
- (409) *Ebenda.*
- (410) 5月5日付の『フォルクス・ツァイトウング』の記事 Das leipziger Komitee zur
Gründung eines deutschen Arbeitervereins bittet ... in: VZ, No.104, 5. Mai 1863
によれば、ベルリンの新聞でラサールの見解を支持したのは Deutsche
Gemeinde-Zeitung と反動派の Bürgerblatt だけだったという。
- (411) Lassalle, Erklärung vom 22. April 1863, in: VZ, No.95, 24. April 1863.
- (412) Die Red [aktion von der Volks-Zeitung], in: VZ, No.95, 24. April 1863.
- (413) *Ebenda.*
- (414) Der Berliner Arbeiter-Verein. Im Auftrag: Dittmann, Entgegnung vom 30. April
1863, in: VZ, No.100, 1. Mai 1863.
- (415) –Berliner Arbeiterverein, in VZ, No.92, 21. April 1863 を見よ。
- (416) Der Berliner Arbeiter-Verein. Im Auftrag: Dittmann, Entgegnung vom 30. April
1863, in: VZ, No.100, 1. Mai 1863.
- (417) ベルンシュタインはのちに著したシュルツェ＝デーリチの伝記においても、
ラサールのデマゴギーに対するシュルツェの闘いにかかなりの紙幅を割いて
いる。A. Bernstein, *Schulze-Delitzsch. Leben und Wirken*, Berlin 1879, S.123-127
を見よ。
- (418) Agitatorische Demagogie. I, in: VZ, No.94, 23. April 1863 を見よ。
- (419) *Ebenda.*
- (420) *Ebenda.*